図書館と資料保存：
古くて新しいこれからの課題

一橋大学附属図書館
鈴木　宏子

2018.12.18（火）
松山大学図書館情報学講演会

目次

- 一橋大学の紹介
- 社会科学古典資料センターと保存修復のためのネットワーク形成事業
- 附属図書館の抱える問題
- 国大図協ビジョン2020に見る担うべき役割
- 古くて新しいこれからの課題

まずは自己紹介から

- 鈴木宏子（すずきひろこ）

- 現職：一橋大学附属図書館
  - 2014～2015　学術・図書部学術情報課長
  - 2016～2018　学術・図書部長兼学術情報課長

- 前職：北海道大学附属図書館
  千葉大学附属図書館
  東京大学附属図書館

一橋大学の紹介

一橋大学の紹介（歴史）

- 明治8（1875）年　森有礼、銀座尾張町に
  商法講習所を私設
- 明治17（1884）年　東京商業学校
- 明治20（1887）年　高等商業学校
- 明治35（1902）年　東京高等商業学校
- 大正9（1920）年　東京商科大学
- 昭和２４（1949）年　一橋大学

一橋大学の紹介（研究教育理念）

- 充実した研究基盤を確立し、新しい社会科学の探究と創造の精神のもとに、独創性に富む知的、文化的資産を開発、蓄積し、広く公開する。

- 実務や政策、社会や文化との積極的な連携を通じて、日本及び世界に知的、実践的に貢献する。

- 豊かな教養と市民的公共性を備えた、構想力ある専門人、理性ある革新者、指導力ある政治経済人を育成する。

一橋大学の紹介（構成）

- 4学部
  - 商学部、経済学部、法学部、社会学部
- 5研究科、1研究所
  - 経営管理（旧・商学）研究科、経済学研究科、
  - 法学研究科、社会学研究科、言語社会研究科
  - 経済研究所
- 学生数　学部4,400名、大学院1,900名
- 教職員数　教員360名、事務職員等　180名

一橋大学の図書館

一橋大学の図書館（特徴）

- 蔵書数　200万冊
- 電子ジャーナル　17,250種
- 社会科学の総合大学としての蔵書構成
- 建学以来の約60に及ぶ貴重なコレクション
- 中央図書館制度
  - 教員の研究用図書を図書館に集中
  - 教員の研究のための図書館（と教員は認識）

大学図書館ランキング

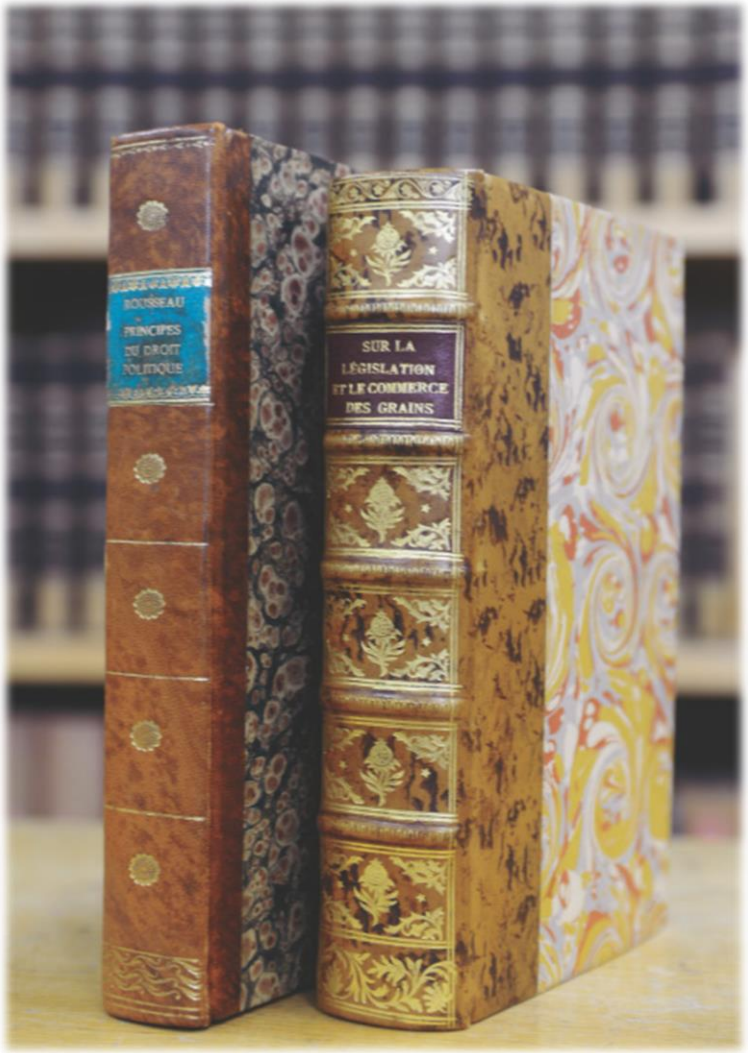
（朝日新聞社「大学ランキング」より

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
総合順位	4	7	5	3	4	1	3	4
貸出冊数順位 **（学生1人あたり）**	34	35	32	35	35	31	33	圏外
蔵書冊数順位 **（学生1人あたり）**	14	14	15	14	14	14	14	14
受入冊数 **（学生1人あたり指数）**	16.0	59.1	52.7	46.3	59.5	100.0	10.9	56.5
図書館経費 **（学生1人あたり指数）**	65.2	52.7	60.3	44.3	57.4	43.6	54.6	68.2

一橋大学の学内図書館（室）

- 附属図書館
  - 中央図書館
  - 経済研究所資料室
  - 統計情報センター
  - 千代田キャンパス図書室
  - 社会科学古典資料センター

一橋大学
社会科学古典資料センター



社会科学古典資料センター

- 昭和53（1978）年　図書館から独立して設立
  - 1850年以前の洋古版本約8万冊を所蔵
- 主なコレクション
  - 大正11（1922）年　メンガー文庫（経済）
  - 大正10（1921）年　ギールケ文庫（法学）
  - 昭和4（1929）年　左右田文庫
  - 昭和49（1974）年　フランクリン文庫
- フランクリン文庫収蔵を契機に貴重書図書館として図書館から独立

メンガー文庫

- オーストリア学派の創始者の一人として知られる経済学者カール・メンガー（1840-1921年）が蒐集した約2万冊からなる世界的コレクション。
- 3つの特徴
  - 経済学・社会思想の古典の充実度
  - ヨーロッパの十数ヵ国語による周辺諸学への豊富な広がり
  - メンガー自身による多くの書き入れ、自筆ノート、書簡などのドキュメントやマニュスクリプトを含む
- 社会科学の世界4大文庫（ゴールドスミス、クレス、セリグマン文庫と共に）に数えられる。

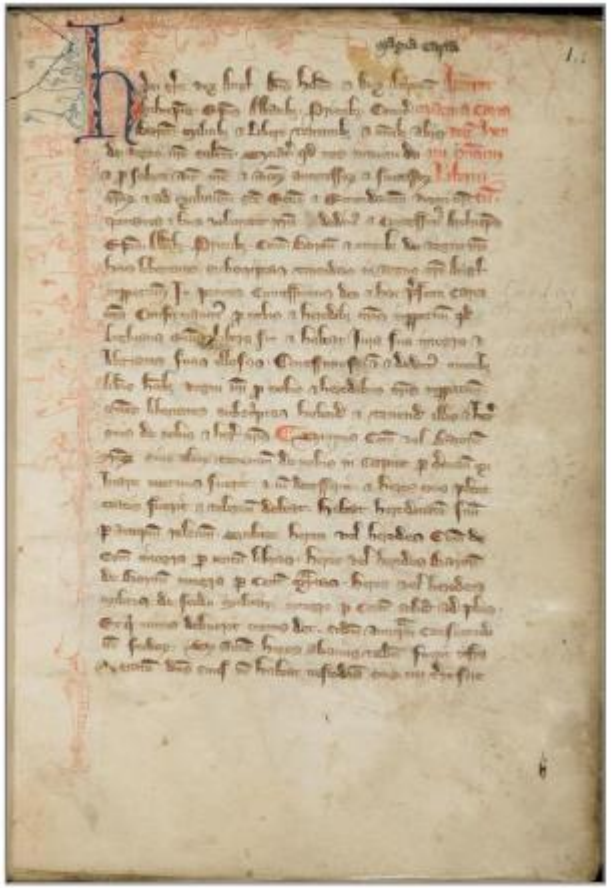
メンガー「国民経済学原理」 1871年

経済学におけるオーストリア学派の祖にして、「近代経済学」の創始者のひとりである、カール・メンガーの記念碑的著作『国民経済学原理』の著者手沢本。

フランクリン文庫

- 古典文献のリプリントで知られるバート・フランクリン（1903-1972年）の個人コレクション。図書約7,000冊、パンフレット類約9,000点、マニュスクリプト約600点からなる。図書の中にはインキュナブラが含まれ、クレチェンチの『農業便宜論』（1471年）やアウグスティヌスの『神の国』（1489年）などがある。
- マニュスクリプト類の中には、マグナカルタの写本2点（14世紀）、メディチ家の帳簿、チュルゴーの筆跡のある手紙、フーリエ、エティエンヌ・カベー、J. B. セーの手紙などが含まれている。なかでもフランスのロブリエール家のコレクション（14～18世紀）27冊は体系的なもので、中世の封建諸侯の歴史を研究する上での重要な史料と考えられる。

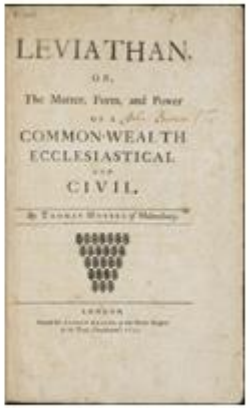
フランス王ルイ14世が王室衣装係の帽子職人に与えた「官職保証書」1688年



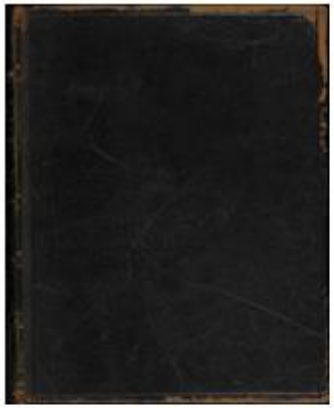
1300年頃筆写されたマグナカルタの写本

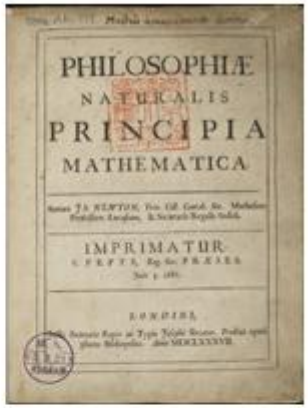
その他一般貴重書

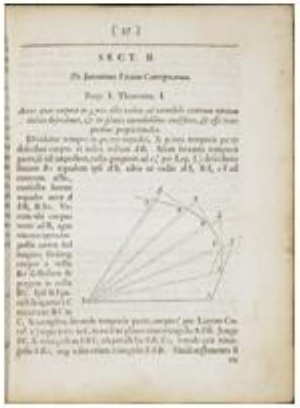
アダム・スミス「国富論」1776年



ホッブス「リヴァイアサン」1651年







ニュートン「プリンキピア」1687年

主な事業

- 利用・閲覧
- 研究・調査
  - 学術誌の刊行、講演会、科研費による研究
- 講習会事業
  - 西洋社会科学古典資料講習会（38回開催）
  - 西洋古典資料保存講習会（19回開催）
  - ひらめき☆ときめきサイエンス（7回開催）
- 保存修復事業
  - 保存修復工房

多様な講習会

- 西洋社会科学古典資料講習会（3日間）
  - 古典研究、書誌学、資料保存
  - 対象：大学図書館職員等
- 西洋古典資料保存講習会（3日間）
  - 保存修復の知識・技術
  - 対象：大学図書館職員等
- ひらめきときめきサイエンス（1日）
  - 日本学術振興会が主催する中高生向けプログラム
  - 古典資料センター見学、保存箱作成等の実習

保存修復工房

- 1995年保存修復工房設置
- メンガー文庫マイクロ化事業に合わせて、保存修復を開始
- 工房スタッフ＝保存修復や製本の専門家

工房の仕事

1. 劣化調査
   1. カルテ作成
2. 保存作業
   1. 低温処置
   2. 紙の修理
   3. 保存容器作成
   4. 保存製本

3. 書庫内環境整備
   1. 定期清掃
   2. 虫害対策
   3. 温湿度管理
   4. 紫外線対策
   5. 地震対策
   6. 配架時の工夫

西洋古典資料保存に関する拠点およびネットワーク形成事業（文部科学省　概算要求事業）

概算要求事業の開始

保存修復事業の財源の危機
　大学後援会支援事業の中止

財源の確保→概算要求事業への応募→採択

「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」とは

文部科学省共通政策課題　文化的･学術的な資料等の保存等　H28-30年度採択　概算要求事業

- 明治以降わが国の発展に寄与した学術文化遺産である西洋古典資料の現状
  - 深刻な劣化
  - 専門人材の枯渇
  - 保存技術継承の危機

課題解決へ

- 中核的専門人材育成
- 保存状況調査
- ネットワーク形成

実務研修制度

派遣元：各図書館

受入先：
一橋大学社会科学古典資料センター

訪問調査
事前ヒアリング

カリキュラム作成

保存修復工房にて実務研修（1～3か月）

＊研修期間方法は応相談

①専門知識の習得
②保存修復実務の実習
③各館の状況に応じたアドバイス
④都内近辺の図書館等を訪問調査

成果の還元

①環境調査、劣化調査の実施および環境改善
②保存知識による蔵書管理のマネジメント
③自館または地域での研修会による専門知識の伝搬と継承

実務研修実績

- H28年度
  - 4名（国立大学2、私立大学1、国立図書館1）
- H29年度
  - 4名（国立大学3、国立図書館1）

- H30年度
  - 2名（国立大学2）

実務研修生のコメント

東京地区　国立図書館
（H28年6月，H29年5月）

西洋古典資料の実物に触れながらマンツーマン体制で丁寧にご指導いただけたこと、特に専門的な知識・技術が必要とされる革装本の保存処置について集中的に学べたことは、私にとって非常に得難い経験となりました。この度の実習で得た知見を、今後の資料保存活動に大いに活用させていただきたいと思います。

北海道地区　国立大学図書館
（H28年10月）

時間をかけて学ぶ中で，実践的な知識だけでなくコレクション全体として資料保存を考えるという視点を身につけることができました。マンツーマンの手厚い研修体制で瑣末なことも気軽に質問できる点が他の研修にない特長だと思います。本学の状況について専門家ならではのアドバイスをいただくこともでき，感謝しております。

実務研修生のコメント

東京地区　私立大学図書館
（H28年11-12月）

こちらの要望に沿ったカリキュラム設定で、社会科学古典資料センターで長年培われてきた資料保存に対する取り組みを体系的に学ぶことができました。マンツーマンによる指導で、率直な質問や意見交換もしやすく、今後本学における資料保存対策を考える上で、向かうべき道を教えていただいた研修となりました。

関西地区　国立大学図書館
（H29年1-3月）

劣化調査から保存修復の実技まで、細部に亘って細やかにご指導いただき、大変勉強になりました。研修を終えまして、当館でも、西洋古典籍に対する劣化調査を始めております。お世話になりました一橋大学社会科学古典資料センター、並びに附属図書館の皆様には心より御礼申し上げます。本当に、ありがとうございました。

実務研修生のコメント

九州地区　国立大学図書館
（H29年6-7月）

実務研修では製本構造から資料の劣化状態を把握するという目を養うことができました。その資料が作られた背景など、資料の背負ってきた歴史を原材料や製法から読み解くことができるということも興味深かったです。
１点１点の資料の状態を把握することは容易ではありませんが、資料を後世へ残していくために、研修で学んだことを活かしていきたいです。

東北地区　国立大学図書館
（H29年9-12月）

本学では近年、古典資料の組織的な保存計画を進行中です。今回は担当部署の一員としての研修参加でした。延べ６週間のカリキュラムを３回に分けていただき、宿泊所なども遠方からの参加には嬉しい環境でした。マンツーマンの実習方式で、一般的な知識・技能はもちろん、各館の個別事情に応じた相談ができるのも心強かったです。

工房スタッフの指導を受ける実務研修生

上司の方

派遣元図書館のコメント

実務研修後，講師として「革装本レッドロット対策勉強会」を実施しました。勉強会は大変好評で，これまで数回にわたり開催しています。実務研修で得られた専門的知識を共有することで，本学が所蔵する西洋古典資料の保存に役立てたいと考えています。

当館における「貴重な所蔵資料の利活用のための修復・保存事業」を推進する、人材育成の一環として、このたび参加させていただきました。 大変理想的で確実なカリキュラムにより、研修生本人と当館にとって大変有意義な機会となりましたことに感謝申し上げます。

自館の力だけでは持つことができないノウハウの詰まった研修を、じっくり受けられるプログラムがとても魅力的で、スタッフの 成長をうながせる貴重な機会だと思います。また、研修期間の相談にも応じていただけるため、スタッフを出す側としては大変助かりました。ありがとうございました。

平成30年秋の新図書館オープンに向けた資料移転の準備を進めており、中でも、劣化した貴重書をどうやって無事に移転させるかが喫緊の課題となっています。
研修生には、今回の研修の成果を早速活かして、対策の検討から実行までのマネジメントをしてもらいたいと考えています。

研修後、所蔵する西洋古典籍の劣化調査を計画立案して、研修で考案したカルテによる劣化調査を実施する等、本研修の成果を大いに活かし、また得られた知見を他の館員へ継承し、本学の保存修理業務の中心的役割 として活躍してもらっています。本研修は、着実に本学業務に活かされています。

全国の大学で所蔵する主な西洋古典資料

北海道大学
ティーメ文庫
ボリス・スヴァーリンコレクション等

小樽商科大学
シェル文庫
大西・手塚記念文庫等

京都大学
ビュッヒャー文庫
マイヤー文庫
上野文庫
財部文庫等

東北大学
ゼッケル文庫
ヴント文庫等

主に地域での核となる大学に声をかけ
研修参加を依頼

東京大学
ルター・コレクションア
ダム・スミス文庫
エンゲル文庫
ブリンク文庫等

大阪大学
アダム・スミスコレクション
カントコレクション等

慶應義塾大学
アダム・スミス文庫
インキュナブラ
コレクション等

九州大学
基礎医学古書集成
トマス文庫
17-18世紀国際法史・国制史コレクション等

名古屋大学
ホッブスコレクション
18世紀フランス
自由思想家コレクション
水田文庫等

中央大学
ヒュームコレクション
ベンサムコレクション
等

実務研修のコンセプト

- 修復技術を学ぶというよりは、
- 資料保存についてトータルにマネジメントできる人材を育てる。

- 習得した技術はその研修生一代で終わる可能性もあるが、
- マネジメント能力は各館の状況に合わせてカスタマイズし継承していくことができる。

本事業にて気付いたこと

一橋大学社会科学古典資料センターの役割

- 国内唯一の西洋古典資料に特化した工房を持つ図書館および研究機関
- 西洋古典資料保存に関する講習会実施等その知識と技術の伝搬に努めてきた。

しかし、図書館を取り巻く環境や図書館の機能の変化により

- このままでは資料保存について**共に協力すべき図書館も人材も周りに居なくなってしまう**のではないか

そこで、本事業の本学にとっての意義を改めて考えると

- 全国の人材育成　＝　古典資料センターにとっての**協働する仲間**の育成
- 全国的な人材育成は、実は本学にとっても、いや本学にこそ必要とされるものであった。

全国的にも、実務研修生の今後の活躍に期待

- 各大学内で異動はあるものの、今後も本研修を受けた人材として**学内および各地域で活躍の場**を作ってほしい。

保存は終わりの無い事業

- 修復や劣化への手当てをしても新たな劣化が生じることもある。
- だからこそ、**人材育成とその協力＝ネットワークが必要**。

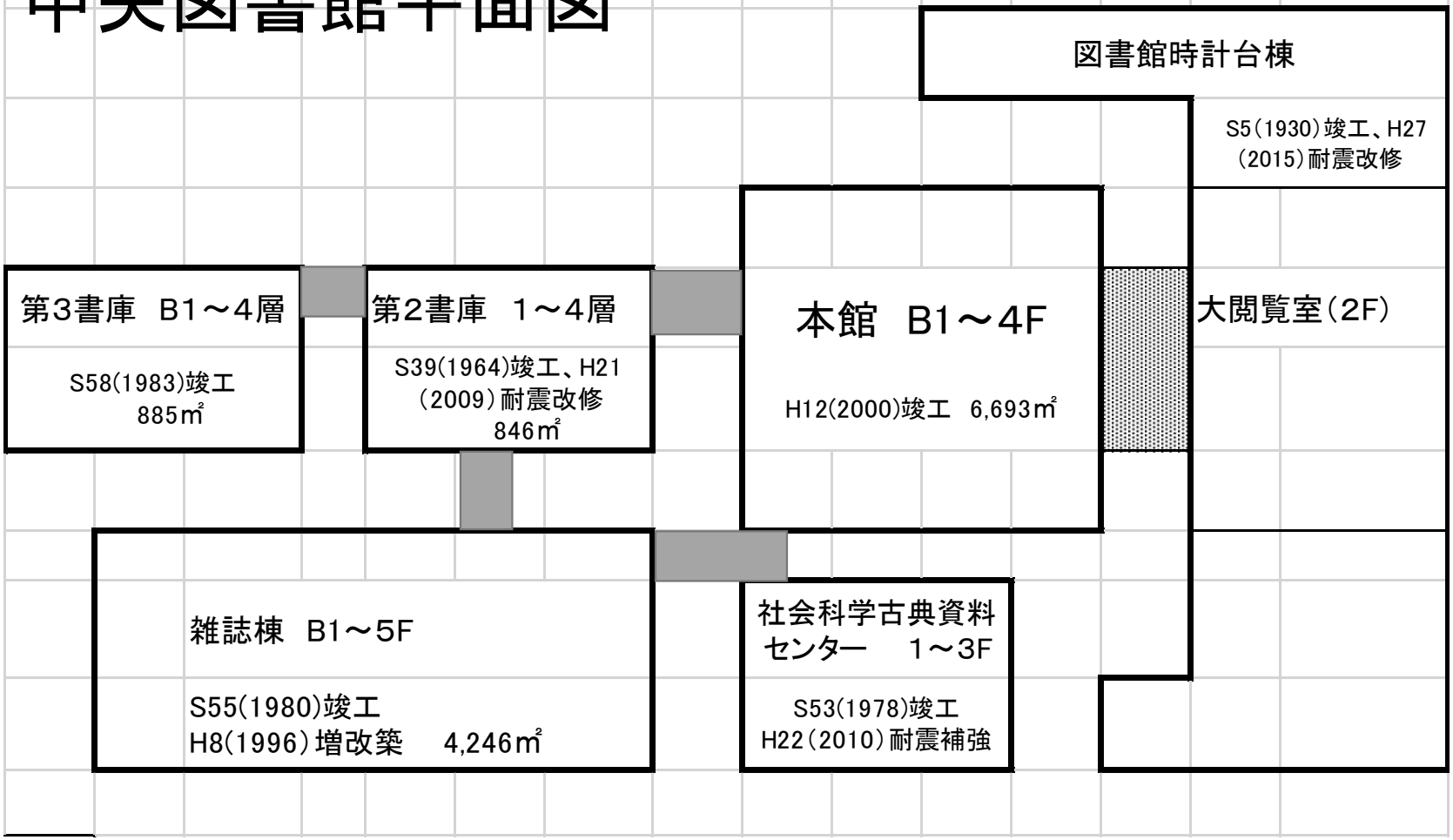
これからの課題

- 保存修復事業の継続
- 財源の確保→可能性は？

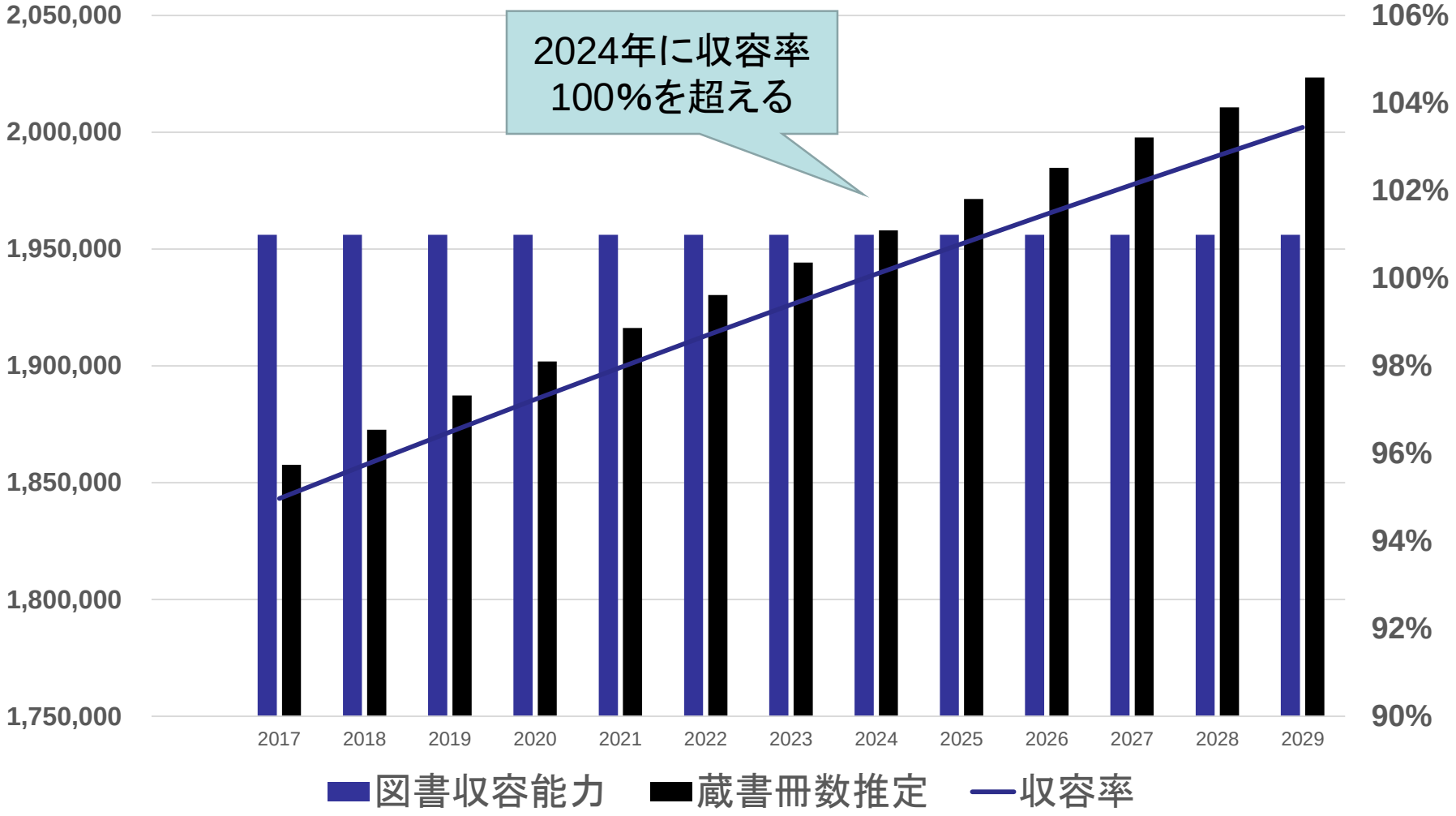
- 一大学では困難なことを、ネットワークの形成により、全国的な人材育成に広げていくこと

一方、
図書館が抱える課題

中央図書館平面図


図書館時計台棟
S5(1930)竣工、H27
(2015)耐震改修
第3書庫　B1～4層
S58(1983)竣工
885㎡
第2書庫　1～4層
S39(1964)竣工、H21
(2009)耐震改修
846㎡
本館　B1～4F
H12(2000)竣工　6,693㎡
大閲覧室(2F)
雑誌棟　B1～5F
S55(1980)竣工
H8(1996)増改築　4,246㎡
社会科学古典資料
センター　1～3F
S53(1978)竣工
H22(2010)耐震補強

一橋大学図書館蔵書収容状況（2017-2029推計）



書架狭隘化問題（1）

- 限りあるスペース
  - ラーニングコモンズと増築の波は終息
  - 書架の更新のみでは予算獲得ならず
- グラフの資料以外にも、収容済み・未登録の寄贈資料多数
  - 増え続けるOB等からの寄贈問題
  - 断れない人（有力OB）多数

書架狭隘化問題（2）

- 限られたスペースで今後増やさない、あるいは減らしていく選択を取らざるを得ない
  - 購入予算は減少傾向
  - 電子資料への移行を加速化？
  - 寄贈受入基準の見直し
    - なるべく受けない、受け取らない

断捨離！？

- 資料の除却を真剣に考える
  - 代替手段のあるもの
    - 重複
    - 電子化資料
      - 電子ジャーナル、電子書籍、OA利用可能資料
      - 他（国立国会図書館等）で利用可能資料
    - シェアード・プリント、共同保存・共同利用
  - 代替手段の無いもの
    - 自大学の特性に合わせて取捨選択

事例1：電子書籍への期待と現状

- シンポジウム「大学図書館蔵書の電子書籍化の未来を語ろう」（H30年度国大図協東海北陸地区助成事業 2018.9.20＠金沢大学附属図書館）

- テーマ：大学図書館での電子書籍の導入と蔵書構築の今後を考える
  - 学術書の電子書籍化で書架スペース問題を解決するには？
  - 利用者にとって有用な電子書籍とは？
  - 大学図書館にとって有益な電子書籍ビジネスモデルとは？

事例1：電子書籍への期待と現状

- 国立大学図書館蔵書の電子書籍化に関するアンケート調査　（57機関回答、回答率62%）
  - 電子書籍利用の実感が薄い
  - 図書館から紙の本を減らすことへの懸念
    - ブラウジング、紙の有効性、モノとしての価値
  - 大規模な除籍実績　あり53%、検討中9%
  - 除籍実施のために必要なこと
    - 除籍基準（根拠）の見直し、教員の理解
    - シェアードプリント、代替資料の確保、etc etc

事例2：紙媒体から電子媒体へ

- 浜松医科大学スマート・ライブラリ構想
  - 図書館の改修計画
  - 学長主導の図書館改革
  - 県内国立大学との連携

紙媒体からの脱却

製本雑誌の70%
図書の30%
を除却予定

学内合意形成

電子蔵書構築計画

事例2：紙媒体から電子媒体へ

- 浜松医科大学スマート・ライブラリ構想
  - 国大図協ビジョン2020
  - 重点領域①　知の共有
  - ＜蔵書＞を越えた知識や情報の共有

◆ 自律的な就学のための支援
◆ ICTを活用した双方向コミュニケーション
◆ 人間形成を促す学修空間

蔵書と引き換えに確保したスペース「議論の場」で、新しい「知の拠点」を構築

大学の使命＝良き医療人の育成への貢献

大学図書館には何を残すべきか？

誰のために？

何のために？

何が必要？

大学図書館はどうやって生き残っていくべきか？

国大図協ビジョン2020に見る図書館が担うべき役割

国大図協ビジョン2020

国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン2020～

大学図書館は，今日の社会における知識基盤として，記録媒体の如何を問わず，知識，情報，データへの障壁なきアクセスを可能にし，それらを活用し，新たな知識，情報，データの生産を促す環境を提供することによって，大学における教育研究の進展とともに社会における知の共有や創出の実現に貢献する。

https://www.janul.jp/ja/organization/vision2020

3つの重点領域

1 知の共有

〈蔵書〉を超えた
知識や情報の共有

2 知の創出

新たな知を紡ぐ
〈場〉の提供

3 新しい人材

知の共有・創出のための
〈人材〉の構築

重点領域 ❶

知の共有

〈蔵書〉を超えた知識や情報の共有

大学図書館は，知の共有という観点から，大学における教育・研究に必要な知識，情報，データを網羅的に提供する必要がある。紙の図書や雑誌等によって構築された従来の蔵書に加え，電子ジャーナルや電子ブック等の電子的リソース，機関リポジトリに収載される研究論文，学習教材やデータといった教育研究成果，さらにはインターネット上にあって誰もが自由にアクセスできる有用なコンテンツをも含む全体を対象として知の共有のための方策を検討し，実現する。

重点領域 ❷

知の創出

新たな知を紡ぐ〈場〉の提供

大学図書館は，これまで人と知識や情報，あるいは人同士の相互作用を生み出すコミュニケーションの場であり，知を創出する空間であった。これからは，旧来の「館」の壁を超えてその場を拡張し，さらには物理的な場だけでなく，知のネットワーク上に存在する仮想空間を新たな知を創出するための場として活用することにより，教育・学習の質を向上させ，研究活動を支援するとともに，大学と社会との連携を促す。

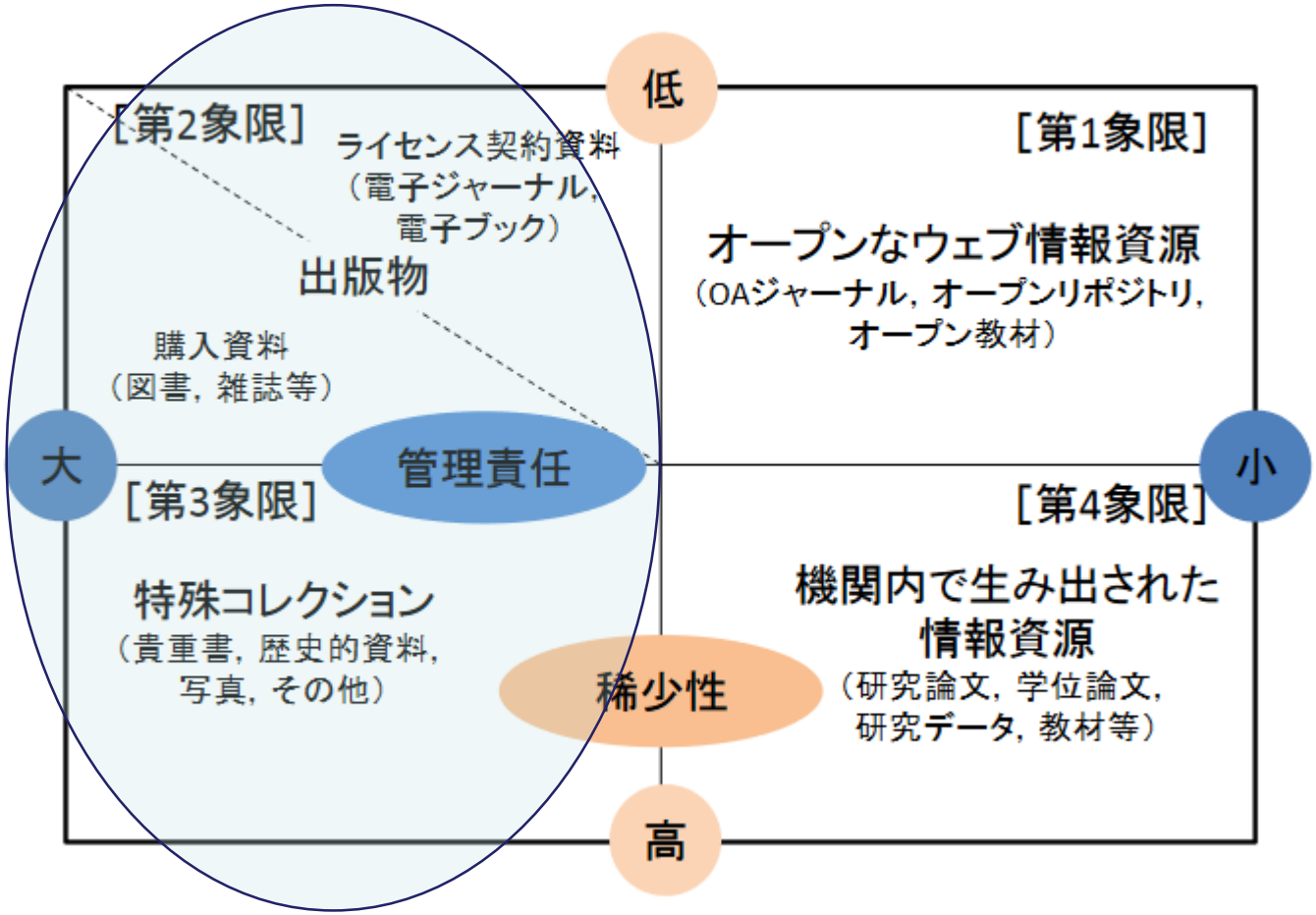
重点領域 ❸

新しい人材

知の共有・創出のための〈人材〉の構築

大学図書館は，さまざまな能力やスキルを有する人材が混在するハイブリッド（複合的）な人材の集合体を形成することで，大学図書館に期待される新たな役割を果たすとともに，多様な知の共有と創出を促す。そのために，新たな人材の構築が実現できるような制度を整備する。

コレクション・グリッド



【図５】これからの大学図書館がサービス対象とするリソースの全体像

出典：「大学図書館機能の強化と革新に向けて–国立大学図書館協会ビジョン2020　解説　」
http://www.janul.jp/j/organization/minutes/research_meeting/janul-2020vision_commentary.pdf

各資料群に対して，大学図書館が行うべきこと

- **オープンなウェブ情報資源：**
  包括的／選択的アクセスの提供
- **出版物：**
  包括的／選択的アクセスの提供
  協力・連携に基づく選択的電子化と永続的保存
- **特殊コレクション：**
  包括的／選択的アクセスの提供，利用のための電子化，
  オリジナル形態での永続的保存
- **機関内で生み出された情報資源：**
  大学図書館における取り扱い範囲の拡大，
  包括的／選択的アクセスの提供，
  作成から利用に至るまでの電子化，永続的保存

出典：「大学図書館機能の強化と革新に向けて-国立大学図書館協会ビジョン2020 解説 」
http://www.janul.jp/j/organization/minutes/research_meeting/janul-2020vision_commentary.pdf

出版物、特殊コレクション
モノのとしての資料にどうつきあうか

- 電子ジャーナル等電子資料の確保に追われていた。
- パッケージ契約は「選書」を放棄（あるいは単に忘れて）させた。
- 新たに発信することに追われていた。
- その間に、紙資料はお荷物になった？

もう一度、紙資料に向き合おう

ある実務研修生の意見紹介

- 大学図書館の現場で資料の現物に対する関心が希薄
- 電子化により現物を手に取る機会が無くなった
- ある程度の規模の大学図書館であれば、少なくとも一人から数名の専門的知識は必要
- 全国の大学図書館の所蔵資料を世に残すためにも、この分野の全体的なレベルの向上が望まれる。

古くて新しい
これからの課題

一橋大学の経験から

- 保存事業を通じて資料そのものと長年向き合い続けてきたことにより→
- 図書館でも電子を含めて資料内容やその価値に立脚した判断を行えることが重要という 認識に辿り着き→
- その実現には、自館の資料に精通し「資料全体のマネジメント」ができる人材が必要であることを認識した。

今、資料問題に関して必要とされる人材

- ものとしての資料の価値を見抜く力
- 資料をマネジメントする能力

- 電子も含めた最適な資料を取捨選択し、快適な学習・研究環境をプロデュースする能力
  - 自館の資料に精通し、自大学に最適な研究・学修環境を創出する

課題解決に必要なこと

保存、電子化への転換、人材育成 etc
ひとりでは、できることに　限界がある。

学内他部署・学外大学図書館との
戦略的連携・ネットワーク構築

ご清聴ありがとうございました。

皆さんの図書館等にとって
少しでも参考になれば幸いです。

参考文献

1. 床井 啓太郎. 西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業. カレントアウェアネス-E. E1846 No.312, 2016.10.06 http://current.ndl.go.jp/e1846 （accessed 2018-02-27）

2. 西洋古典資料の保存に関する全国的拠点の構築 —社会科学古典資料センターの取り組み. HQ vol.56 秋号（October 2017） http://www.hit-u.ac.jp/hq/vol056/pdf/hq56_10-12.pdf（accessed 2018-02-27）

3. 鈴木宏子. 平成28年度～30年度文部科学省共通政策課題（文化的・学術的な資料等の保存等）「西洋古典資料保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」の2年間を終えて. 一橋大学附属図書館研究開発室年報 第6号 2018 http://hdl.handle.net/10086/29323（accessed 2018-10-31）

4. シンポジウム「大学図書館蔵書の電子書籍化の未来を語ろう」（2018年9月20日）プログラム、趣旨説明（アンケート結果含む） doi/10.24517/00052373 （accessed 2018-12-10）

5. 小山憲司. 大学図書館における電子書籍導入の現状と課題 シンポジウム「大学図書館蔵書の電子書籍化の未来を語ろう」（2018年9月20日）
doi/10.24517/00052374（accessed 2018-12-10）

6. 伊原尚子. 電子書籍化の未来は来る？浜医スマート・ライブラリ構想
シンポジウム「大学図書館蔵書の電子書籍化の未来を語ろう」
（2018年9月20日） doi/10.24517/00052376（accessed 2018-12-10）

7. 国立大学図書館協会. 国立大学図書館機能の強化と革新に向けて 国大図協ビジョン2020：
解説 https://www.janul.jp/j/organization/minutes/research_meeting/janul-2020vision_commentary.pdf （accessed 2018-12-10）
パンフレット https://www.janul.jp/sites/default/files/2018-05/janul-2020vision_pamphlet_non-spread.pdf （accessed 2018-12-10）